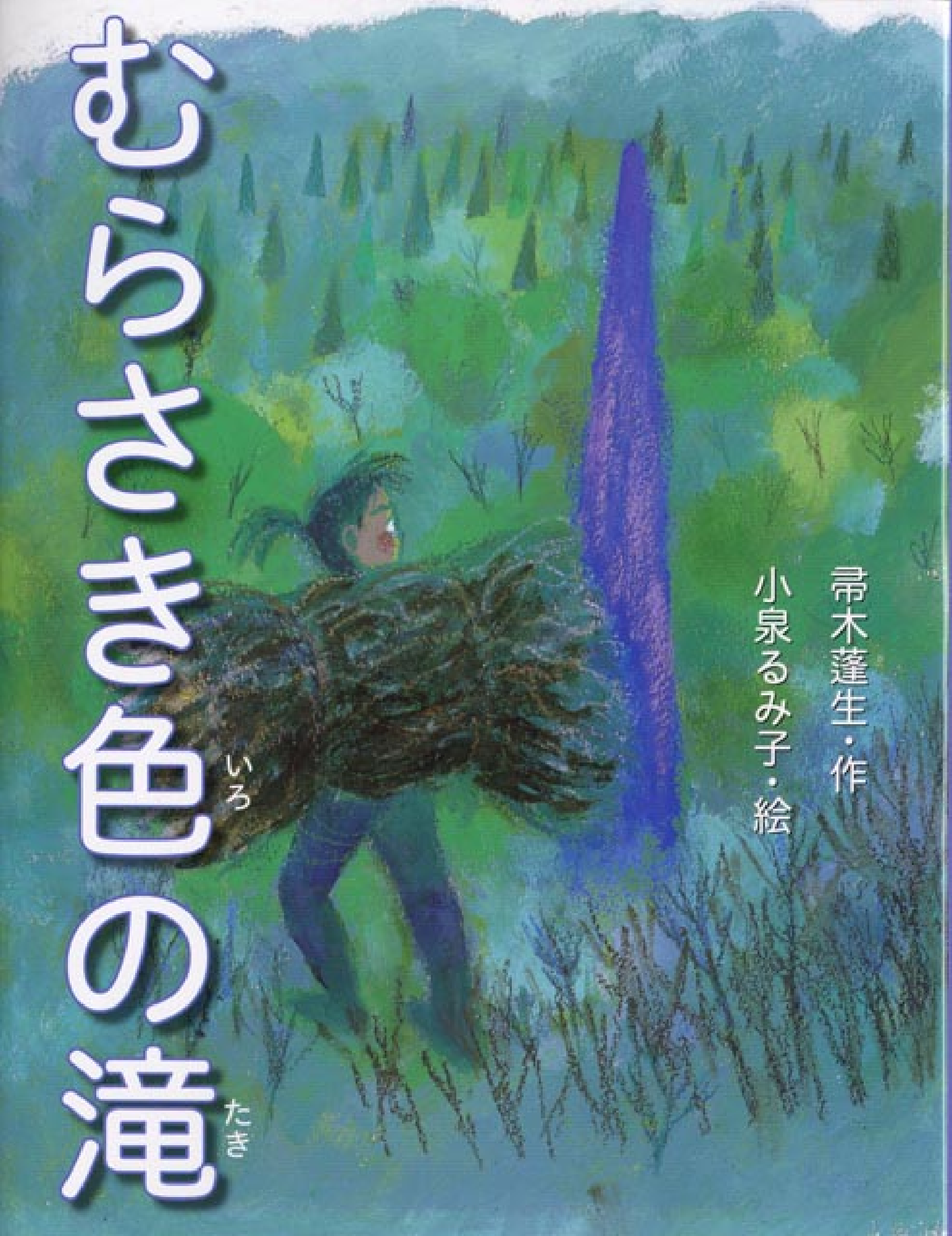


むらさき色の滝

帚木蓬生・作
小泉るみ子・絵

むらさき色の滝

帚木蓬生・作
小泉るみ子・絵

山のふもとに小さな家がありました。そこには、おばあちゃんと孫の庄一が住んでいました。

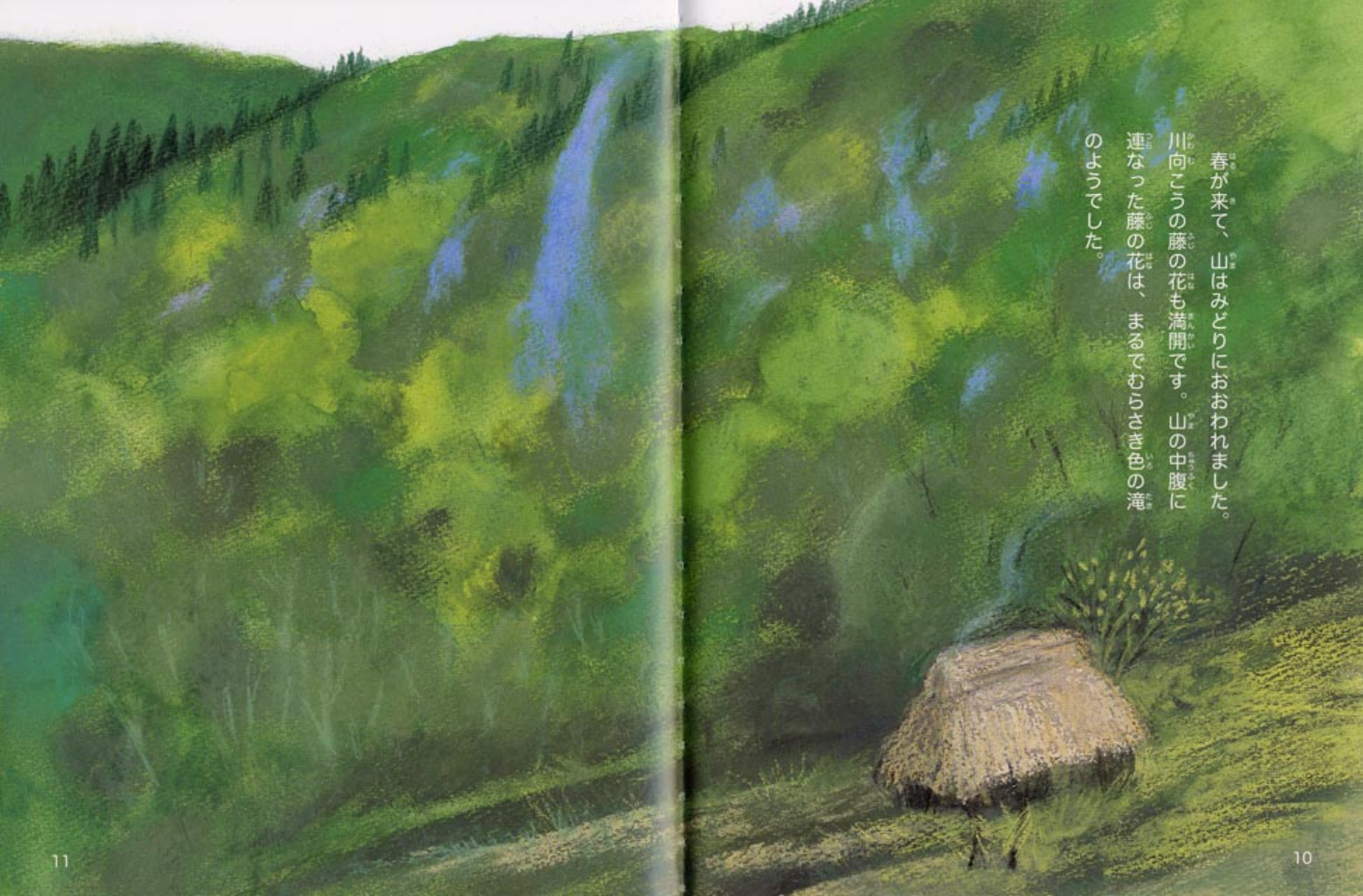
庄一の両親は、庄一が小さいころ、はやり病でなくなったのです。おばあちゃんが親がわりになって、庄一を育てました。

おばあちゃんは、かご作りの名人でした。

かごは藤づるや、山にはえるいろいろなつるを使って編みます。庄一も一生懸命に手伝い、大きくなるにつれて、うでも上達していきました。

ふたりで山にはいり、木にからみついた
つるをとります。骨のおれる仕事でした。
庄一が力いっぱいつるを引っぱってはがし、
おばあちゃんが集めてたばねます。庄一は
もうりっぱな青年になっていました。

ある日、庄一が山からもどると、おばあちゃんがたおれていました。長い間はたらきづめだったので、持病が悪化したのです。それからというもの、庄一の看病する日々がはじまりました。



春が来て、山はみどりにおおわれました。
川向こうの藤の花も満開です。山の中腹に
連なった藤の花は、まるでむらさき色の滝
のようでした。

庄一の看病にもかかわらず、おばあちゃんの病気は重くなる一方でした。

「庄一や、すまんのう。おまえばかりにはたらかせて」

「ううん、薬が買えるのも、おばあちゃんから、かご作りをならったおかげ。はやく元気になるとよか」

庄一は、昼はつるとりにいき、夜はおばあちゃんの看病をしながら、かごを編むのです。

「庄ぇや、いくらつるがいるといっても、川向こうの山の中腹にある大藤のつるだけは、とっちゃいかん。おまえのおとっつぁんとおっかさんは、あの大藤ばあがめとった。おまえはおぼえておらんじゃろが、おっかさんの背中で、大藤ばながめとったとよ」